

# 育成光線とは何か？

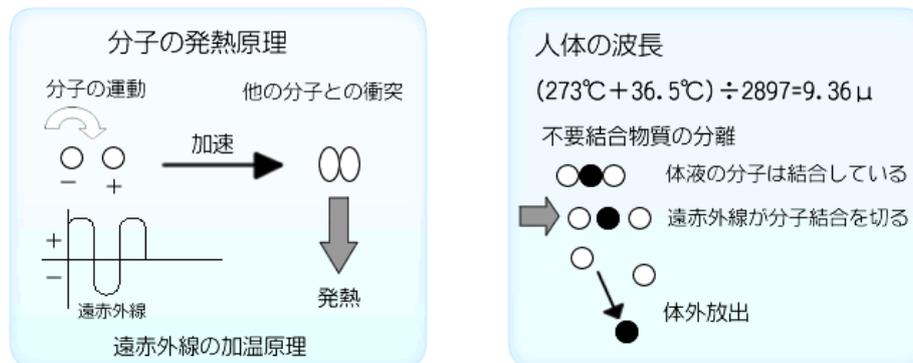
山城 眞 (元・宮崎大学客員教授)

黒澤 宏 工学博士 (宮崎大学名誉教授)

## I、遠赤外線と育成光線

1981年 NASA の研究結果として、太陽光線の中で人体に最も有効に作用するものは遠赤外線であり、その中でも4～14ミクロン波長の遠赤外線は人体に最も深達力があり、人体の分子との共振作用により熱エネルギーを発生させるとの発表がありました。

## II、遠赤外線の過熱作用



遠赤外線は熱ではありません。

電磁波という一種の電波です。有機物に吸収されやすく、吸収されると熱に変わるので。熱の伝わる方法には熱伝導、対流、放射の3種類がありますが、遠赤外線を伝える方法は放射伝達だけです。

熱は物質の表面を温め、遠赤外線は物質の内部を温めるという違いがあります。

### 遠赤外線の働き

遠赤外線は放射伝達により深層部の細胞や組織に到達します。

## III、遠赤外線の特徴

### 深達力により体内深層部に働きかける

深達力は波長に比例し、近赤外線による電気ストーブなどは皮膚表面だけ温まるので直ぐに冷えてしまいます。

しかし焚き火にあたると体の芯まで暖かく感じます。

これは灰などが放射した遠赤外線が体の深層部に浸透して、体内の水分子と共振共鳴作用を起こし、共鳴による振動エネルギーが熱エネルギーを発生させる為です

### 放射伝達と共鳴共振作用

人体は約60兆個の細胞で構成されており、相互に1分間に約2000回の振動を起こし、体温を保っています。また人体の65～70%が水分です。

伝導による熱は皮膚下2mm、放射による熱は皮膚下40mmへ達します。

遠赤外線の波動数は人体を構成している分子と殆ど同じ波動数の為、強い共振作用が起こります。

体温が1℃下がると免疫力は約35%、基礎代謝は約10%、体内酸素は約50%低下し、機能や新陳代謝が弱ります。

## 1、マジェスティレラス（不老皇石）

NASA から飛び立った宇宙飛行士が、宇宙船の中で約6ヶ月間の生活を終えて、無事地球に帰還し続けています。一体、無重力の狭い空間の中で、どのようにして生命を維持することができたのでしょうか。食事は、水は、空気は、風呂は、トイレは…次々と知りたいことが発生してきます。

NASA は、西洋医学、東洋医学だけでなく、独自の育成光線理論を加え、宇宙飛行士の生命活動に対応していると伝えられています。

現在の日本では、NASA が発表した育成光線理論という新しい生命工学についてはあまり研究されていません。圧倒的に西洋医学による医療研究が推進されているのも一つの原因かもしれません。

ベストエコロジーでは、早くからハワイ研究所を中心に育成光線理論による「健康食品や健康機器」の研究開発に取り組んできました。その結果誕生したのが『マジェスティレラス（不老皇石）』です。

私たちは、東洋医学、西洋医学、育成光線理論を総合的に受け止め、生命活動を支える「生体反応の活性化」を追究してきました。研究の結果誕生した『マジェスティレラス』は、生体反応の活性化を6個の石（セラミック）の力に結集した技術です。

今後、更に研究を重ね、「健康機器」の厚生省認可を取得するよう計画しています。『マジェスティレラス』のご愛用者には、ご使用の感想や結果について情報提供をお願いできれば大変嬉しく思います。

実証実験（モニター様）では、大変好評を頂いています。客観的なデータを積み重ね、商品としての完成度を高めて行きたいと考えています。

## 2、NASAの発表（新しい生命理論）

NASA は、人の生命活動を分子運動の波長で追究して発表しています。人の生命を支えている基本の物質は水とタンパク質です。この水とタンパク質の分子運動は、体温36.5℃の時「9.6 $\mu$ mの波長である」とNASAは発表しました。

物質の分子運動は、温度（熱エネルギー）によって変化します。人間の平均的な体温は36.5℃とされています。病気になって発熱した場合、当然水とタンパク質の分子運動は変化します。結果として、9.6 $\mu$ mの波長とは異なってくるようになります。逆に、老化や特別な病気によって、体温が36.5℃より低下することがあります。この時も、水やタンパク質の分子運動が変化しているはずで、当然、その波長も変化してきます。

よく考えてみると、人の生命活動を「分子運動の波長」で表わすことは最も科学的な方法ということができます。ただ難しいのは、人が発散している分子運動の波長を簡単に測定できないということです。

NASA の発表が、日本の科学者たちにすんなり受け止められていない最大の理由かもしれません。しかし、ベストエコロジーでは健康食品や健康機器を研究開発するとき、NASA の育成光線理論を新しい生命工学と受け止め、エネルギー論（波長論）の立場からも追究してきました。なぜなら、東洋医学（中医学）の立場と共通することがあったからです。

### 3、人が発散している波長（NASA 理論）

東洋医学では、「気」ということが大切にされています。中国の学者から「気とは何か」を学んだ結果、NASA の波長論に通じることが分かってきました。人が生命を維持している時には、水やタンパク質の分子運動によって 9.6 $\mu\text{m}$  の波長の波を放出していることとなります。

この波は、エネルギーとして伝わっていくはずですが、このエネルギー現象を電磁波と呼んでいます。専門的には、電界、磁界が繰り返して広がっていく現象のため電磁波と呼ばれています。

ということは、人は常に 9.6 $\mu\text{m}$  の波長の電磁波を発散しながら、生命活動を維持していることとなります。人の生命活動があるということは、平均 36.5 $^{\circ}\text{C}$  の体温が保たれていることです。この時の水やタンパク質の分子運動が電磁波（波長）になって外に放出していると考えられます。東洋医学での「気」と同じ考え方が可能と推論できます。

宇宙食は、栄養学を基本にした物質論（機能性物質）だけでなく、エネルギー論の立場からも追究されていることとなります。それは、食のカロリー計算とは異なったエネルギー論です。生命を維持しているということは、体の内部を含め、全身から 9.6 $\mu\text{m}$ （36.5 $^{\circ}\text{C}$  の時）の波長（電磁波）を発散し続けているはずですが、このエネルギー発散をどのようにして守っていくかが宇宙食の研究開発につながっていくと考えられます。

今までの健康食品や健康機器開発の発想とは、全く異なった立場からの追究ということとなります。

### 4、分子運動の波長とは

分子が振動すると、その振動が波として伝わっていきます。このレベルの波を電磁波と呼んでいます。電磁波の波の大きさには違いがあります。その長さの違いを波長として表わしています。

通常単位は、マイクロメートル（ $\mu\text{m}$ ）が使用されています。1 $\mu\text{m}$  は  $\frac{1}{1,000}$  ミリメートルの関係です。

したがって、9.6 $\mu\text{m}$  という長さは、0.0096 ミリメートルという少々イメージしにくいレベルの長さということになります。人がこうしたレベルの電磁波を発散しながら生きているなどということは、今まであまり検討されてきませんでした。

しかし、東洋医学での「気」や、NASA の「育成光線理論」を追究していくと、新しい生命工学の立場が必要になってくると考えられます。

波長とは、波の長さを示したものです。波の長さが短いと繰り返す波の回数は大きくなってきます。繰り返す波の回数が大きいものを高周波と呼んでいます。通常、紫外線、X 線、 $\gamma$  線（放射線）が高周波として区別されています。

反対に、波長の長さが長くて繰り返す波の回数が小さいものを低周波と呼んでいます。通常、マイクロ波や電波が低周波と呼ばれている電磁波です。

## 5、電磁波の種類

電磁波は、波長（波の長さ）によって種類分けされています。最も波長の短いものをガンマー線と呼んでいます。波長が短いため、物質を通過して変化を与える強い力を持っています。ガンマー線は通常放射線とも呼ばれ、生命体に様々な障害を与えることが分かっています。

ガンマー線より少し波長が長いものを X 線と呼んでいます。レントゲン写真に利用されていますが、やはり生命体に障害を与えます。

次に波長が長いのが紫外線です。紫外線も、ある程度生命体に障害を与えることが分かっています。

人間が進化の過程で色として感じ取らなくなった電磁波が可視光線です。人間は、可視光線の電磁波の波長を、大きく7色に分けて感じ取っているとされています。可視光線より波長の長い部分を赤外線と呼んでいます。この赤外線は大きく三つの部分に分けられています。

人の生命活動と最も深い関係にあるのが遠赤外線です。通常遠赤外線は  $4\mu\text{m}$ ～ $25\mu\text{m}$  の波長帯とされています。したがって、人が発散している  $9.6\mu\text{m}$  の電磁波（波長）は遠赤外線という事になります。

遠赤外線は体に良いとされて来ましたが、生命工学の理論として発表（NASA）されたのは初めてです。地球上の生命は太陽の光によって支えられています。この太陽光の中で、地球に届く遠赤外線が  $3.0\mu\text{m}$  前後～ $12\mu\text{m}$  前後であると NASA は発表しています。この遠赤外線に対応して人は進化してきており、生命活性の基本になっているのです。したがって、特別に「育成光線」と呼ぶとしています。これが、NASA の育成光線理論の概略です。

私たちは、波長の長いマイクロ波や電波を電子レンジ、携帯電話、テレビ、ラジオなどで利用しています。NASA の育成光線理論を受け止めた場合、マイクロ波や電波の波長は「人の生命活動になじみにくい」ということになります。

現在の日本の公式な見解では、マイクロ波や電波は「特に問題なし」とされています。しかし、一部の人はマイクロ波や電波による健康障害を訴えています。こうしたことは、今後の研究によって解明されていくでしょう。

## 6、人の体の生命反応

人の体が、 $9.6\mu\text{m}$  の波長の電磁波で生命を維持しているとするなら、外部から  $9.6\mu\text{m}$  の波長の電磁波を作用すればよいということになります。共振現象によって刺激を受け、生命が活性化すると考えられるからです。

こうした、共振現象の原理から考えると高周波や低周波は人の体にとって好ましい電磁波ではないということになります。場合によっては、拒絶反応を示すことが考えられます。

ガンマー線（放射線）や X 線の高周波が、人体に有害であることは証明されています。また、携帯電話を使用し続けると「頭が痛くなったり」「気分が悪くなる」場合があります。 $9.6\mu\text{m}$  の波長を求める体に対して、 $1,000\mu\text{m}$  以上の波長が作用し続けることは「生命維持」に混乱を与える可能性が生じると考えられます。

したがって、頭が痛くなったり、気分が悪くなるのは身体の「拒絶反応」の一つと考えることができます。

昔の人は、家を造るとき育成光線（ $3.0\mu\text{m}$ ～ $12.0\mu\text{m}$ ）を放出している材料を使っていました。畳（い草）、稲わら、杉、桧などの木材、土や海藻を練った白壁、屋根に使用する茅（かや）などは育成光線を発散していることが分かっています。

昔の人が、こうしたことをどのようにして感じ取っていたのかについてはよく分っていません。昔の人の生活の知恵に改めて学ぶ必要がありそうです。

現代社会は、合成化学物質や電子機器など育成光線とは異なる高周波、低周波の中の生活が続くようになっています。健康長寿社会に向けて、大きな課題になっていると考えられます。

## 7、人の食べ物と波長の関係

人の生命活動を支える中心的役割を果たしているのが内臓です。中でも、食べ物と直接関係しているのが消化器官です。この消化器官は、主に平滑筋と呼ばれる筋肉で構成されています。心臓や肺の筋肉も、平滑筋によって構成されています。平滑筋を構成しているタンパク質の分子運動が  $9.6\mu\text{m}$  で振動しているとするなら、人の食べ物に対して一つの条件が設定されることとなります。それは、できるだけ  $9.6\mu\text{m}$  の波長（電磁波）を放射している食べ物が好都合ということです。共振現象によって、平滑筋の活動が活性化すると考えることができるからです。

こうした考え方は、NASA が育成光線理論を発表するまでほとんど取り上げられることはありませんでした。生命の活性化を「食」の立場で考えるとき、NASA の育成光線理論は大変重要であると受け止めることができます。（ベストエコロジー独自判断）

健康食品やサプリメントを研究開発するとき、単一の機能性物質を追究していくのも一つの方法です。しかし、食を共振現象の立場で受け止めると、常に総合的に判断していくことが求められてきます。すべての食は、人の内臓（身体）と共振現象の関係になっている必要があります。食と食、食と人の内臓（身体）は相互に共振し合って、総合的に生命の活性を生み出していると考えられます。

こうした考え方に立つなら、健康食品は融合食品として受け止める必要が生じてきます。おそらく、NASA が開発している宇宙食は、融合食品として追究され完成しているのではないのでしょうか。ベストエコロジーでは、健康食品の研究開発を、融合食品の立場で追究し続けています。

同時に、育成光線理論による健康機器の研究開発にも取り組んできました。こうした研究は、今までの日本ではあまり取り組まれていませんでした。

## 8、生命活動を支える三つの流れ

人の生命活動は大きく三つの流れによって支えられています。一つは血液の流れです。心臓から大動脈に送られた血液は、全身を循環して静脈を通して再び心臓に戻ってきます。血液の流れは、生命活動に必要な酸素や栄養分を運ぶ重要な役割を果たしています。

もう一つは、生体電流の流れです。全身に分布している神経の中を電子 ( $e^-$ ) が流れることによって、人の神経伝達システムが成り立っています。全身に分布している神経細胞の中を電子 ( $e^-$ ) が移動することによって、様々な情報が脳に伝達されているとイメージすればよいでしょう。

神経細胞のことを専門的にはニューロンと呼んでいます。このニューロン（神経細胞）とニューロンのつなぎ目は小さなすき間になっていることが分かってきました。この小さなすき間（空間）の組織をシナプスと呼んでいます。シナプスには、送られてきた電子 ( $e^-$ ) の流れである電気信号を、次のニューロン（神経細胞）に伝達する特別な仕組みが存在しています。それは、セロトニン、ドーパミン、アドレナリンなどの体内化学物質によって受け渡しをするという仕組みです。人の生命活動は、こうした神経伝達システムによっても支えられているのです。

三つ目の流れがリンパの流れです。人の体液は重力によって足の方へ集まってきます。

同時に、血管からも滲み出て全身に分布しています。こうした体液はリンパ液として回収される仕組みになっているのです。これがリンパの流れです。

リンパの流れはリンパ管とあって、血管とは別の組織を流れるようになっています。リンパ管を流れる液体をリンパ液と呼んでいます。リンパ液は、最終的に静脈に集まり、再び血液の流れになっていく仕組みになっています。リンパ液の中に存在している特別な細胞がリンパ球と呼ばれる免疫細胞です。

人の免疫を支える中心的な役割を果たしているのがリンパ球と呼ばれる免疫細胞たちです。免疫細胞については後で詳しく説明することにしましょう。

こうして、人の生命活動は大きく三つの流れによって支えられているのです。健康長寿を実現するには、この三つの流れを常に順調にしていくことが大切です。入浴や、温泉の利用、岩盤浴などは、この三つの流れを良好にする健康方法として古くから知られています。

## 9、血液の流れ（循環）

全身に酸素と栄養分を運んでいるのが血液です。心臓から酸素や栄養分を全身に運ぶための血液が流れているのが動脈です。体内燃焼後の二酸化炭素や老廃物を運んでいるのが静脈ということになります。

動脈と静脈は血管の末端でつながっており、毛細血管と呼ばれていました。最近では微小血管と呼ばれるようになり、新しい生命工学として取り上げられることが多くなっています。特に、人の脳や内臓の微小血管の状態と健康長寿に深い関係があるとされるようになっています。

中でも脳内の微小血管と認知症の関係が指摘されています。脳内の微小血管が破れて小さな染みができた場合、認知症の原因の一つと推測されているのです。微小血管の破れはなかなか見つけることができません。最近の研究では、認知症は約 25 年間の経過を経て発病するとされています。

その間、アミロイドβ、ヘモグロビン A1c（血糖）、微小血管出血、などが進行の原因として取り上げられ、短鎖脂肪酸、IgA などの腸内環境が予防（進行を止める）に役立っていると研究報告されています。（認知症の問題は別テーマとして取り上げます）

人の微小血管は再生されます。手の指を怪我した場合、微小血管が破れ出血します。しかし、やがて怪我が治ると同時に微小血管が再生され、正常な状態になることは誰でも経験していることでしょう。

血液の流れをよくして、微小血管を守り通すことは、そのまま「健康長寿」につながって来ることになります。老化を予防したり、病気の予防や改善に取り組むとき、いかにして微小血管を守り通すかということが重要な課題になってきます。

『マジスティレアス』は、血流をよくし、全身の微小血管の保護と再生を期待して研究を続けてきました。

NASA が発表した育成光線理論を人の体の共振現象として受け止め、20 年以上に渡って研究して完成したのが『マジスティレアス』です。

## 10、人体の経穴（ツボ）、東洋医学より

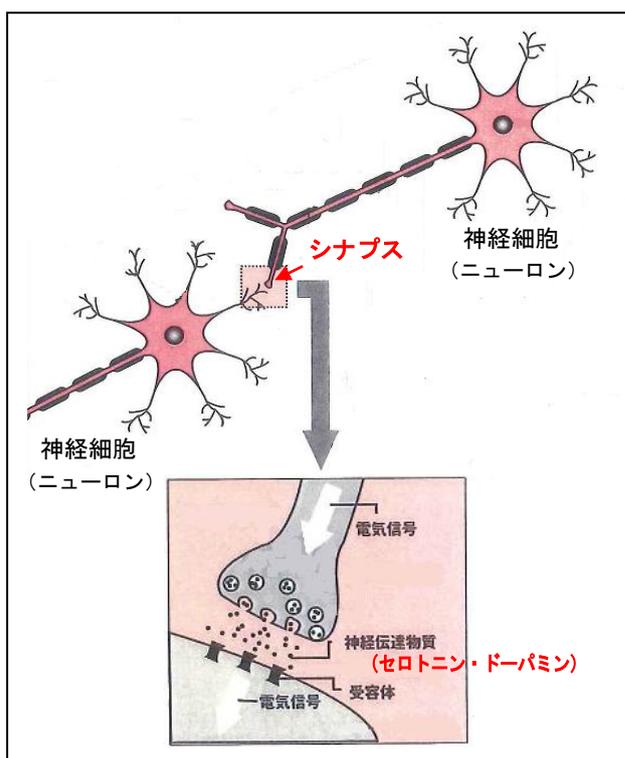
古くから中国では独自の医学が発展していました。現在では東洋医学として確立され、中医学とも呼ばれるようになっています。そこで、直接中国に行って中医学について学ぶことにしました。一口に中医学といっても、様々な方法が存在していることが分かりました。

例えば、人体の経穴（ツボ）についても、医学者、研究者、治療者によって異なった

表現や視点が存在しています。しかし、共通していたことは、人の生命活動を「気」として受け止めていることです。元気、精気、覇気（はき）、気力などは中医学を語源にしているというのです。

私たちは、中医学（東洋医学）の「気」を、NASA が発表した育成光線理論と重ねて受け止め、研究を進めてきました。西洋医学ではエネルギー放射と表現してもよいかと思えます。

こうした人の生命活動の「気」、「育成光線」、「エネルギー放射」を体内伝達する組織が神経伝達の仕組みです。すでに説明したように、人の全身に分布している神経は生体電流（e<sup>-</sup>）によって情報伝達されています。



神経と神経の小さな空間（シナプス）をつないでいるのが、アドレナリン、ドーパミン、セロトニンなどの体内化学物質です。こうした体内化学物質は、人の精神活動にも深く関係していることが分かっています。特に、セロトニンは人の精神活動を安定させる重要な役割を果たしていると考えられています。

東洋医学での経穴（ツボ）への刺激、西洋医学でのセロトニン分泌は、今後更に新しい生命工学として追究されていくでしょう。NASA の育成光線理論を含め、「生命の神秘」は、科学として解明されつつあります。

人の神経組織は、ただ痛いとか熱いなどを感じるだけでなく、生命活動全体を支える重要な役割を果たしているのです。

<資料出展>『脳の不思議』

監修：高橋明彦 発行：日本文芸社

## 1 1、足のつば例と神経の分布

人は病気になると発熱します。これは、体温を上げて体内の代謝酵素を活性化して病気を改善しようとする自然の仕組みです。最近では、体温を上げることはそのまま健康長寿につながってくると考えられています。

東洋医学では、「冷え」が最も人の健康を害するとされています。中医学を学ぶため中国に行ったとき、レストラン（食堂）で出される水やジュース類は全て温かいものばかりに直面し、びっくりしました。冷たい水、冷たいジュース、冷たい食事は人の生命活動を不活発にしてしまいます。

人にとって最もやっかいながん細胞は、低体温になるほど活性化して増殖することが分かっています。無重力の中で生活する宇宙飛行士にとって、体温の低下（冷え）は、「危険信号」であると伝えられたことがありました。育成光線理論が体温 36.5℃を基準にしている背景にもなっています。

多くの場合、冷えは足の指先から起ってきます。血流が心臓より最も遠いことも原因

になっています。もう一つは、足の指先に向って抹消神経が細かく分布していることも原因とされています。

冷えの解消方法として足の経穴（ツボ）を刺激することが行われています。抹消神経を刺激して冷えを解消する方法です。NASA の育成光線理論では、9.6 $\mu\text{m}$  の波長を放出する物を作用させて、共振現象を起させることが考えられます。抹消神経が刺激を受けて、平均体温とされる 36.5 $^{\circ}\text{C}$ を保つことを狙った方法です。

人は進化の過程で二足歩行を身につけました。そして、足先まで抹消神経を発達させています。この抹消神経を常に刺激する一つの方法として「マジスティレアス」を研究開発しました。使用することによって、体温の上昇変化が期待されます。基礎体温の上昇は、健康長寿を実現する重要な要素になります。例え 0.1 $^{\circ}\text{C}$ の体温上昇であっても、体内の基礎代謝に与える影響は大きいものがあります。

日常的な筋肉運動と併用すれば、より効果的と考えられます。足の指先を冷やさないことが健康長寿につながる第 1 歩と受け止めておきましょう。

## 1 2、リンパの流れ

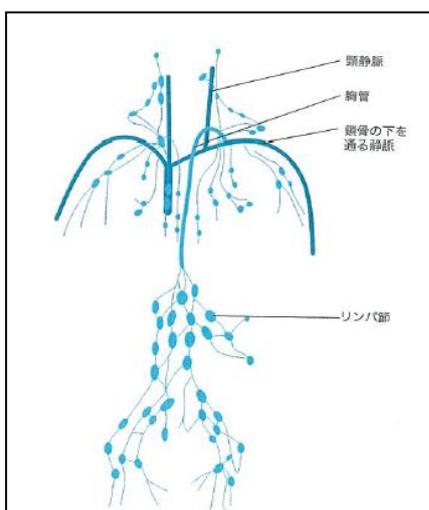
血管から滲み出た液体や細胞に含まれていた水分は、体液となって存在しています。この体液がリンパ液となってリンパ管に入って流れていきます。特に、重力によって下の方に移動した体液は、足に溜る傾向があります。

血液の流れは心臓によって強く押し出されますが、リンパ液は自然に移動する仕組みになっています。そのため、足先からスタートするリンパの流れは、時々足に溜ってむくみの原因になることがあります。

リンパ液の中には、リンパ球と呼ばれる免疫細胞が存在し、全身を移動しながら人の免疫活動を支えています。リンパの流れは、鎖骨の下を通る静脈に合流する仕組みになっています。

多くの方は、左側の静脈を中心にリンパの流れが合流していますが、リンパの流れ方には個人差があることが分かっています。右側中心だったり、左右同じように流れている人も存在しています。そのため、東洋医学での経穴（ツボ）にも個人差があると考えられています。

リンパの流れを最も利用するのが、がん細胞です。がん細胞はリンパを利用して移動しようとしています。こうしたがん細胞やウイルス、細菌の移動を止める仕組みとして、至る所にリンパ節が存在しています。



リンパの流れとリンパ節のイメージ

〈資料出展〉『身体をめぐるリンパの不思議』

中西貴之著・技術評論社

がん細胞は、リンパ節を次々と突破して転移して行こうとします。したがって、リンパ液に存在するリンパ球（免疫細胞）の働きを常に活性化しておくことが必要になってきます。「マジスティレアス」は、リンパの流れを補強する目的でも研究してきました。人の体液が育成光線を放出しているとするなら、同じ波長を作用させて共振現象を期待するということが可能です。特に、足先からスタートするリンパ（球）の流れを活性化し、免疫力アップを期待するという考え方です。

リンパに関しては、まだまだ分からないことが多く、医学者たちの大きな研究テーマにもなっています。ただ、はっきりしていることは健康長寿を願うなら、リンパの流れを活性化し免疫力を高める必要があるということだけは確かです。

### 1 3、免疫細胞（白血球）の種類

リンパ液の中を流れている免疫細胞は、リンパ球と呼ばれ大きく 3 種類に分類されています。

#### 1. NK 細胞

ナチュラルキラー（自然の殺し屋という意味）細胞は、体内に侵入した細菌やウイルスおよびがん細胞を攻撃してくれます。

#### 2. B 細胞

骨髄（bone marrow）で作られるため B 細胞と呼んでいます。ヘルパー T 細胞の指令を受けて、異物に対する抗体を作って攻撃してくれます。体内でのミサイル発射をイメージすればよいでしょう。

#### 3. T 細胞

骨髄で作られた後、胸腺（Thymus）で完成するため T 細胞と呼んでいます。T 細胞は、更に 3 種類に分類されています。

##### (1) ヘルパー T 細胞

免疫活動の司令塔と呼ばれています。がん細胞やウイルス、細菌に対する攻撃指令を出すのがヘルパー T 細胞です。

##### (2) サプレッサー T 細胞

ヘルパー T 細胞がやたら攻撃指令を出すと、アレルギー反応や自己免疫反応が発生します。そうした免疫の過剰反応をコントロールしているのがサプレッサー T 細胞です。

##### (3) キラー T 細胞

NK 細胞と協力して病原体やがん細胞を攻撃してくれます。NK 細胞は独自の判断で攻撃しますが、キラー T 細胞はヘルパー T 細胞の指令によって活動しています。

#### 4. マクロファージ

マクロは大きいという意味です。ファージは食べあさるという意味と受け止めたらよいでしょう。リンパ球の仲間ではありませんが、古くなった細胞や体内に侵入した雑菌、弱ったがん細胞などをどんどん食べてくれます。別名「体内の掃除屋さん」と呼ばれ、人の免疫活動で重要な役割を果たしています。

主な免疫細胞を紹介しましたが、こうした免疫細胞は低体温になると活性が低くなっていくことが分かっています。「体の冷え」ががんの発症や病気の発病につながっていくことが説明されるのはこうした理由からです。

健康長寿を実現するには、免疫の仕組みを正しく理解し、日々の健康管理に取り組む必要があります。

### 1 4、三つの流れの起点

足の裏には、東洋医学での経穴（ツボ）が集中しているとされています。日本では、竹を割って置き、足の裏の土踏まずを刺激する健康方法が存在しています。土踏まずに刺激を与えるのは「三つの流れ」の起点になっていると考えられるからです。

#### 1. 血液の流れの起点

#### 2. 生体電流の流れの起点（電子 e-の流れ）

#### 3. リンパの流れの起点

タイ式マッサージでは、足の裏の起点（経穴）に強い刺激を与える方法が存在しています。悲鳴を上げるほどの痛みを感じることもあるようです。伝統的な健康方法として知られています。

そこで、この起点に強い育成光線（9.6 $\mu\text{m}$  レベルの波長）を作用させることに取り組みました。共振現象によって三つの流れが同時に活性化すると考えられるからです。

9.6 $\mu\text{m}$  の波長は遠赤外線領域です。そこで、遠赤外線を放出する岩石の研究に取り組みました。参考になったのはハワイの溶岩大地です。

ハワイ島では、現在も粘性溶岩が噴出し続けています。この粘性溶岩が冷えた溶岩大地では、遠赤外線が放出されており、パワースポットとして多くの人が住みついています。

日本列島は、火山国です。地下のマグマが冷えて花崗岩になり、各地で産出されています。この花崗岩に地圧が加わってバラバラに砕けた地層が存在しています。破碎帯と呼ばれる地層です。破碎帯の花崗岩は、ハワイ島の溶岩大地より遠赤外線の放出が強いことが分かりました。

日本各地の破碎帯を現地調査し、遠赤外線（育成光線）の放出が特に強い岩石を確保することができました。こうした岩石は、人がほとんど立入っていない場所に存在しており、確保し製品化するのに約 20 年の歳月を要しました。

特に、本来持っている岩石の力を更にパワーアップするため高温処理をしています、大変難しい「匠の技」レベルの技術となっています。

「マジスティレウス（不老皇石）」は、NASA の育成光線理論を受け止めて、特別な岩石を特別な技術で処理したオンリーワン商品です。試作による仮データでは、使用された皆さんの基礎体温が上昇しています。今後、様々な利用方法を検討し、健康長寿社会の実現に貢献したいと計画しています。

## 15、9.6 $\mu\text{m}$ の強い波長とは

今まで説明してきたことをまとめてみます。

遠赤外線は電磁波の波です。波の大きさは  $\mu\text{m}$ （マイクロメートル）という単位の長さです。遠赤外線は通常 4.0~25.0 $\mu\text{m}$  とされています。その中で NASA は 3.0 $\mu\text{m}$ ~12.0 $\mu\text{m}$  を育成光線と呼ぶと発表しました。その理由は、人の体を構成している水やタンパク質が 9.6 $\mu\text{m}$  の波長の電磁波を放射していることが分かったからです。この時の平均体温が 36.5 $^{\circ}\text{C}$ とされています。

このことは、人の体に外部から 9.6 $\mu\text{m}$  の波長を持つ電磁波を作用させると、共振現象が起り生命の活性化が生じると考えられます。強い共振現象を起すには、強い波長の電磁波（育成光線）を作用させる必要があります。強い波長とは、波の上下運動の幅が大きくなることです。これを振幅といいます。

したがって、育成光線レベルの電磁波を放射している破碎帯の花崗岩を利用する場合、高温処理をして振幅を大きくする必要があります。「マジスティレウス」は、原材料確保から焼き上げまで、多くの人たちの協力（プロジェクトチーム）で完成しています。マジスティレウスというのは皇帝という意味です。

レアスは「貴重な」という意味で受け止めるとよいでしょう。電子機器に使用している貴重な金属をレアメタルと呼んでいます。金・銀・白銀（プラチナ）などのレアメタル鉱石は、貴重な地下資源になっています。

中国やローマ帝国の皇帝たちが、不老長寿を願って、宝石として利用する岩石を追い求めていたと伝えられています。こうした皇帝たちの願いを、技術として完成したのが「マジスティレウス（不老皇石）」です。

東洋医学、西洋医学、NASA の育成光線理論を総合的に受け止め、失敗と試行錯誤を繰り返しながらようやく完成することができました。

多くの人の健康長寿に貢献できることを願っています。



ロイヤル・レイモンド・ライフ博士  
(1888-1971)

<写真出展> : THINKER Question Authority

人々を苦しめる、あらゆる種類の病気を、完全に治療する方法を約 80 年も前に見つけた人物です。

医療の正史には決して出てこない、抹殺された天才の壮絶な人生が物語っています。

「ガンを殺す技術」

ライフ博士は、すべての物質と同様に、目には見えないレベルでウイルスもそれ独自の振動数で、振動していることに着目しました。

そして、そのウイルスと共振する周波数の光を照射して、ウイルスをさらに振動させました。微生物がその構造的な形を維持するのに耐えきれなくなるまで照射レベルをさらに上げてやると、ウイルスの形は歪み、崩壊してしまうのです。

ライフ博士は、この周波数を「致死反応振動数 (MOR)」と呼びました。